



2年後の就農へ5名が研修開始

4月4日(木)、秋田市園芸振興センターの令和6年度新規就農研修の開講式が開かれました。この春から第10期生の5名が研修に参加。同センターの圃場や市内の農家で行われる実習で栽培技術を身に付け、農業経営にかかる知識なども学びます。5名は関係者から激励を受け、2年後の新規就農への決意を新たにしました。

今春に県立金足農業高校を卒業して同研修に参加した工藤慎大さんは「ネギの生産に興味がある。雇用就農を視野に入れて、ネギを中心に多くのことを学びたい」と意気込みました。

新規就農研修をスタートする第10期生ら



秋田市産品の商品開発・有効活用法を探る

3月28日(木)、令和5年度第2回秋田市有望産品商品開発協議会がJA秋田なまはげ会館で行われました。同協議会は秋田市産の農産物を活用した商品開発などを行っており、冷凍商品「あきたかおりえだ豆」は令和5年度に約4・6トンが製造されて県内外で販売されました。

当JAや秋田市、秋田米飯給食事業協同組合らが参加し、枝豆のほか、秋田市産米を使った冷凍の納豆巻きや太巻きなどの開発経過や商談の進捗状況、プロモーション活動の実績なども確認して、さらなる活路を探りました。

販売実績や商談の経過を振り返る参加者



令和6年産米の作業始まる

令和6年産米の栽培や出荷に向けて、農作業やJAの活動などがスタートしました。

3月中旬からは令和6年産米の出荷契約や転作の取りまとめなどが、当JAの支店や営農センターなどで行われました。営農経済部の職員が生産者から栽培品種や面積、出荷数量やこだわり米の取り組み状況などを聞き取りながら確認し、契約書類を受け取りました。

秋田市上新城では4月12日(金)、種子用の「あきたこまちR」の播種作業が初めて行われ、15日(月)にかけて育苗箱約1万箱に播種を終えました。令和7年からの一般作付けに先駆けて今後種子の栽培が進められ、来年から生産者に引き渡されます。



育苗期の4月中旬から5月上旬には苗代の現地指導が管内各地で行われ、営農指導員が苗の色や葉数、長さや根の状態などを観察して、苗の生育に問題がないか診断しました。生産者からは苗の生育状態を見て疑問に思った点が質問され、営農指導員は今後の温度管理や箱処理剤の使用法、田植えの適期などを伝えました。

- 1 : 6年産米の出荷契約を結ぶ生産者 (男鹿地区営農センター)
- 2 : 種子用「あきたこまちR」の播種作業 (秋田市上新城)
- 3 : 水稻苗の状態を観察する生産者と営農指導員 (男鹿市北浦)